

○「2021 写生大会」講評

豊田市美術館の秋の恒例行事であった写生大会も昨年は新型コロナウイルス感染症のために開催することができませんでした。今年の開催も危ぶまれていましたが、対策を講じながら何とか開催することができ、今年は50名を超える参加者があってほっとしています。

美術館庭園を会場に描かれた作品からは、幼稚園の年少さんから小・中学生、そして大人の方々まで楽しんでいただいたことが伝わってきます。

描かれた内容は、美術館の建物だけでなく庭園に広がる様々な景色が、それぞれの視点から描かれています。豊田市美術館の敷地内には美術館本館の建物だけでなく、隅櫓のような歴史的な意匠の建物、庭園に重要な要素となっている池や木々そして屋外彫刻に至るまで、それぞれの参加者が面白味を見つけて取り組んでいただいたことがよくわかります。今年は季節の進み具合が遅いのか紅葉真っ盛りというわけではありませんが、秋らしい雰囲気漂わせる作品も見られました。また、開催中の企画展を意識した作品や一面の空を中心にした作品など参加者の想いが伝わってきました。画材も水彩のほかクレヨン、鉛筆など描き方と同様に個性を感じさせます。

美術館は美術作品を入れる器であると同時に、敷地全体としてその空間を楽しむ場所でもあります。こうしたイベントをきっかけにこれからもより豊田市美術館に親しんでいただけたら嬉しく思います。またのご来館をお待ちしています。

豊田市美術館 館長 高橋秀治

昨年は開催できなかった写生大会ですが、今年は感染対策を施し、ほぼ例年どおり開催することができました。50人を超える方々に参加していただき、この写生大会を待ち望んでいた方が沢山いらっしゃることを知り、美術館としても非常に励みになります。

当日は朝から好天に恵まれ、ご家族やお友達と一緒に美術館や庭園の風景を描きながら、秋の一日を楽しく過ごしていただけたと思います。また、愛知県立芸術大学の学生さんにアドバイスをもらって、新しい気づきとともに満足のいく作品を描き上げたことでしょう。

今年は、暖かい気候と晴天に恵まれたためか、青空を背にした美術館の建物や、空の青を映した池を描いた作品が多く、また秋らしい紅葉を描いた作品も目立ちました。描かれた多様なモチーフは、どれも美術館の建物や庭園の特徴を表すもので、美術館での写生大会らしい作品が揃いました。

・美術館大賞（小4）は、青い空を背景に白い隅櫓が大きく描かれていて、色彩のコントラストが画面を強く印象づける作品です。下から仰ぎ見る構図からは、対象を目で見たとおりにしっかりと描こうとしていることが伝わってきます。それはまた、建物の高さや大きさを十二分に表していて、色彩と共に、描いた本人が感じとった印象が素直に表現されています。画面中央下から上へ続く石の階段には奥行きもしっかり表現されていて、空間把握に優れた作品です。

・美術館館長賞（小5）は、美術館の建物とテラスに並ぶ大きな立体作品、そしてその奥の木立が、奥行きをはっきりと認識させる構図の中に描かれています。立体作品を覆う鏡には、映り込んだ周囲の風景も描かれていて、細部まで観察して描こうとする姿勢が伝わってきます。また、立体作品の赤、黄、青の色彩が、全体に抑えた色調の中でアクセントになっていて、作品に華やかさを添えています。

・高橋記念美術文化振興財団理事長賞（小3）は、木々と建物、そして池がバランスよく配された作品です。木々にはところどころ色づいた葉が描かれていたり、建物を覆う石の壁面の一枚一枚や池を囲う石堤の一つ一つが塗り分けられていたりして、しっかりと観察している様子が分かります。池の水面からは、空や建物、木々が映し出された様子も感じ取れます。作品のどこも見ても、物の固有色を単色で塗り込めたような部分はなく、色彩に対する感覚の鋭さが伝わってきます。

豊田市美術館 チーフキュレーター 北谷 正雄